

# 用言の結合価に見る，体言のブランディング

青山 文啓（桜美林大学大学院）

## Some thoughts on valency and nominals

Fumihito Aoyama (Graduate Division, J. F. Oberlin University)

### 要旨

《あそこに結婚式場がある》に対して《あした結婚式がある》という。「結婚式場」も「結婚式」も見出し語〈結婚〉の複合語として辞典には載せられる。こうして《あそこに学校がある》と《あした学校がある》から，見出し語〈学校〉にも二つの用法が認められる。「結婚式場」のように場所《あそこ》と結ばれる建物としての〈学校〉と，「結婚式」のように日時《あした》と結ばれるイベントとしての〈学校〉である。こうした視点から〈学校〉に二つの用法を認める例は市販の辞典にはめずらしい。しかし，一つの用言が体言どうし（あるいは副用言と）を結びつける結合価（文型）に，単文の基礎を置かないかぎり，どのような用法記述（ブランディング）にも体系性見いだせなくなるだろう。助詞の下位区分，二重主語構文，アスペクト，動詞の自他ペア，などから例をあげ，結合価の有用性について論じる。

### 1. はじめに

ここでは一つの単語をいくつかの用法に分けることを「ブランディング」と仮称する。宮島(1996)が「カテゴリー的多義性」と呼ぶ問題は，ここでいう「ブランディング」に含めて考えたい。宮島(1996)は《大人と子ども》《親と子ども》の二つを比較し，前者は年齢を，後者は親族関係を軸に，並列された二つの体言(nominal)が呼応する例としてあげている。体言を並列させればそこにはゲシュタルト効果が生まれる。つまり，両方の並列表現に現れる〈子ども〉には，ブランチとして分けられるべきべつの側面があることになる。

おなじ問題は以下の(1)(2)の違いにはっきりと現れる。用言(verbal)イルは，体言「夫婦」「公園」を〈子ども〉とそれぞれ組み合わせる（本文中では用言と助詞はカタカナで表記し，見出し語レベルで見た体言を〈 〉に，文節，句，文などその使用例を《 》に示す）。

- (1) 夫婦には子どもが二人いる。
- (2) 公園には子どもが二人いる。

「夫婦」と組み合わせられた(1)の「子ども」は親族としての性格が表面に現れ，「夫婦の実子」という解釈に優先権が与えられる。しかし，(2)のように「公園」などの場所と組み合わせられれば，「子ども」の持つそのような性格は水面下に沈んでしまう。

さらに類例を二対ほどあげておこう。〈結婚〉という単純語は「結婚式場」や「結婚式」という複合語を造る。辞典では単純語を優先して見出し語にするため，用例として提示される可能性しか複合語にはない。用言アルは，建物としての「結婚式場」を「あそこ」などの場所と，イベントとしての「結婚式」を「あした」などの日時と，それぞれ(3)(4)のように結びつける。重要なことは二つある。一つは，用言アルのもとで，建物は場所としか結び合われないが，イベントは日時とも結ばれることである(Lyons 1968, Ch. 8.1)。

- (3) あそこに結婚式場がある。
- (4) あした結婚式がある。

つまり《あしたあそこで結婚式がある》のように，用言アルのもとで三つの体言が結合され，場所の表示にはデ格が，二格の代わりに使われる。こうしてアルには少なくとも二つ

の結合価が区別されるが、イベントの体言が用言アルの結合価に変更を加えると考えてよいだろう（さきほどは同一の体言〈子ども〉を較べたが今回はべつべつの体言である）。用言アルの持つ二つの結合価には、もう一つ見逃せない問題があるが、この点については節をあらためて取りあげたい。

ところで、「結婚式場」と「結婚式」の区別は単一の見出し語〈学校〉には共存する。(5)(6)は二つのべつの結合価だが、おなじく〈学校〉が現れるからである（「あした学校がある」は予定だが、「あしたあそこに学校がある」はバカげた予言としか受け取られない）。

(5) あそこに学校がある。

(6) あした学校がある。

しかし市販の辞典が〈学校〉に二つの用法を区別することはない。辞書業界では「二行項目」という用語があるほど体言の大半は収録語数をかせぎ、その表記を示すためだけにある。アクセントは無視され、《な[がしの さら【皿】》と《な[がしの タ]クシー》とが、単一の見出し語〈ながし【流し】〉のもとに記述される例はおおい(青山 2004)。

宮島(1996)は25年以上前の論考で、私の関わった仕事も紹介されているが、いまでも教えられることばかりである。その眼目は一般の「多義性」から「カテゴリー的多義性」を区別することに注がれる。ここでは「多義性」と「カテゴリー的多義性」とを区別せず、辞典におけるブランディング（用法記述）一般の問題としてあつかい、一つの体言に見られる多義性（用法）を識別するための目安として、用言の結合価に着目する。

## 2. 体言の結合価と、助詞の下位区分

以下、用言を中心に例をあげるが、体言が述部に現れる場合に、結合価の問題が明瞭に意識される例を先に見ておきたい。日本語の助詞が分布によって下位区分されることは暗黙の諒解のようで、ほとんど正面から論じられることはない。(7)(8)(9)に現れる助詞トは格助詞か並列助詞のいずれかである。(7)ではどちらともいえないが、この場合の文節《シャベルと》は(8)のように構成要素として移動させることができる。つまり(7)(8)のトを格助詞に区分することの妥当性は、「同義語」という体言の持つ結合価による。

(7) シャベルとハナスは同義語だ。

(8) ハナスはシャベルと同義語だ。

(9) シャベルとハナスは五段活用だ。

一方、(9)《[シャベルとハナス]は》のように、単一の構成要素内からべつの構成要素として移動できないトは並列助詞と呼ぶしかない。《[シャベルと][ハナスは]》のように、二つの文節をそれぞれ自立させられるかどうかは、述部体言の持つ結合価による。ということは、結合価を想定しなければ助詞の下位区分さえおぼつかないことになる。

## 3. 二重主語構文の拡がり、体言の性格

形容詞などの状態用言を述部に持つ、日本語の二重主語構文はひじょうに幅がひろい。係り助詞ハと助詞ガの組み合わせが表現するのは格役割(case role)ではなく、従属関係（係り）の深浅でしかない（久野 1973 が「総記のガ」と呼ぶのは係りの浅いガである）。このような結合価に流し込まれた「ゾウ」と「ハナ」の指示関係は《ゾウのハナ》であり、(10)と(11)が同義的であることはこの例文とおなじくらい有名である。二重主語構文で気をつけるべきことは二つある。

一つはその際限のなさである。(10)(11)を(12)(13)と較べればそれは明らかだ。つまり(12)(13)の「老人」と「朝」のように指示関係が見いだしにくいものまで、二重主語構文は受け入れるからである。

(10) ズウはハナが長い。

(11) ズウのハナは長い。

(12) 老人は朝が早い。

(13) 老人の朝は早い。

もう一つはこの融通無碍がどこから来るかである。《老人は朝早く起きる》のような動詞述語文が援用され、融通無碍な解釈が行なわれるとすれば、これまで以上に二重主語構文の周辺部を探索してみる余地はありそうである(青山 1998)。

数の少ない形容詞は多義の温床だが、まれに助詞の組み合わせが用法の識別に役立つ。

(14) 彼は料理がうまい。[⇒じょうずだ；とくだ...]

(15) 彼の料理はうまい。[⇒おいしい...]

「料理」は(14)では【能力】だが(15)では【生産物】である。同義語が[ ]内に示した形容名詞(形容動詞語幹)であることは、形容詞との関係を象徴している。宮島(1996)はこれを「カテゴリー的多義性」と呼び、一般の「多義性」から区別する。また、前者が換喩的であるのに対し、後者は隠喩的だという重要な指摘をしている(言い換えれば、単語の用法記述は素朴な素性論にではなく、レトリックに学ぶべきだということだろう：佐藤 1978)。

#### 4. アスペクトと、体言のブランディング

《トマトソースをかける》と《トマトソースをつくる》を較べれば自明だが、「トマトソース」の存在を前提とするか否かは、用言に決定権がある。ということは、アスペクトが用言の性格を換えれば、その結合価のなかに現れる体言の性格も換わらざるをえない。たとえ自他ペアがおなじ体言〈火〉を共有しても、他動詞(16)が行為を宣言するのに対し、自動詞が記述するのは後続する限界点(17)とその状態(18)でしかない。

(16) 火をつけます 《意志》

(17) 火がつけました 《完了》

(18) 火はついています 《結果》

(19) 火をけします 《意志》

(20) 火がきえました 《完了》

(21) 火はきえています 《結果》

試しに、その反義的な表現を(19)(20)(21)にあげた。これら六つの表現のうち「火」の存在が前提とされるのは(17)(18)(19)だが、その存在／非在はすべての体言に関わるため、ブランチには分けられない。ツクルの自他ペアは結合価から見ればデキルだが、先ほどの(17)(18)の順序は入れ替わって、以下のような順序になる：《[16]ソースをつくります>[18]ソースをつくっています>[17]ソースができました》。これがおそらく、進行相を表現できる動詞ツクルと、結果相しか表現しない動詞デキルの違いである。

「多義性」から遠く離れてしまった。話題を本筋にもどすため、交通手段の例と、所持物の例をあげることにしたい。三つの状態用言(22)イル、(23)アル、(24)ナイに、共通して現れるのは〈電車〉だろう。

(22) まだホームに電車がいます。 【車輛】

(23) まだ電車はある。 【手段】

(24) もう電車はない。 【手段】

「梅雨前線」「台風」などはイルを除けば、状態用言にはなじまない。

この節を閉じるにあたって自他ペアに現れる体言について考えたい。〈サイフ〉が「私」と組み合わせられた(25)が象徴的な例である。

(25) 私はサイフを落とした。 【所持物／モノ】

(26) テーブルからサイフが落ちた。 【モノ】

このような場合に【所持物】としての解釈が前面に出てくるが、その自動詞では【モノ】としての解釈しか出てこない。前者の同義語は「紛失する」「落下させる」だが、後者では「落下する」だけであり、体言のブランチとすべき問題ではないことが分かる。自他ペアがおなじ体言を共有したとしても同義的であることを保証しないが、〈子ども〉ではブランチを分けるのに〈サイフ〉で分けないとすれば反芻の余地はある。

## 5. さらにアスペクトと体言に関連して

これまで述べてきたのとは逆に、体言が用言のもとでその性格に影響をおよぼす可能性についても考えないわけにはいかない。このことに関連して、『日本文法研究』（久野 1973, Ch. 9; Kuno 1973, Ch. 10）に提示される以下のような仮説について考えよう：

[+状态的]動形詞は、現在時の状態を差し、

[-状态的]動形詞は、未来時の状態を指すか、現在時の習慣的動作、あるいは普遍的動作を指す。

著者自身のことばによれば、この本はもともと米国で出版された Kuno (1973)を、日本語で著述しなおした日本語版である（「はしがき」には英語版の出版年が“1972”と書かれている）。べつの翻訳者が日本語に訳していたらと想像してみたくなるのは、あまり目にしない用語が日本語版で充てられているからである。「動形詞」は久野が“verbal”に充てた訳語だが、小論では「用言」を充てている。

用語の詮索はべつの機会に廻し、本題に入ることにしよう。久野は“[+状态的]動形詞は現在時の状態を指す”という。先にあげた例文(3)(4)に具体的な固有名を入れて以下の(27)(28)としよう。どちらの例文にも状態用言アルが、つまり久野の[+状态的]動形詞が現れる。しかし、(27)は現在時を指すとも考えられる（無難な解釈は《総称アスペクト》だろう）が、(28)は普遍的・習慣的（つまり総称的）でもなく、未来時を指す以外にない。

(27) 目黒に結婚式場がある。

(28) あした目黒雅叙園で結婚式がある。

ということは、イベントの体言「結婚式」が、状態用言アルを[-状态的]に変更したと考えるしかない。金田一(1950)は-テイルが後続しない動詞を状態動詞とし、それ以外の動詞とに二分した。久野は、金田一(1950)のように明確な基準は示していないが、状態動詞としてあげるのは以下の七つである：〈解ル、出来ル、聞(コ)エル、見エル、要ル、有ル “*aru/ to exist*”, 在ル “*aru/ to have*”)。漢字で書き分け〈有ル “*aru/ to exist*”)と〈在ル “*aru/ to have*”)二種類のアルがあげられる理由は示されていない（Kuno1973 から、必要なところに限りローマ字表記とその英訳を抜粋した）。一方、〈要ル〉はあっても〈居ル〉がないのはなぜか。さらに不思議なのはこうした論考が五十年間放置されてきたことである。しかし、この問題をあらためて取りあげるのは、本章の功績が動詞、形容詞、補助用言（補助動詞）を越えて状態性を認めること、補助用言スギルを論じる後半がこの章の白眉であることをここに記しておきたいからである。

## 6. まとめ

助詞の下位区分、二重主語構文、アスペクト、動詞の自他ペアなどから例をあげ結合価の有用性について論じてきた。「オシエル／オソワル」などの他動詞ペア、「勉強スル」など

の補助用言スル，体言あるいは用言の側の問題とすべきかなど，多義性の話題はつきない。すべてべつの機会を待つことにしたい。

## 謝 辞

小論をまとめるにあたりいろいろなかたにお世話になったが，お名前をあげるのは論述を整理してからにしたい。

## 文 献

- 青山文啓(1998) 二重主語構文と辞書，『言語』27(3)  
青山文啓(2000) 統語論—単語の二重分節を中心として，『一橋論叢』124(4).  
青山文啓(2004) ことばの研究と辞書に記載される情報，『桜美林論叢』31.  
青山文啓(2013) 二つの四階層モデル—『文型』と『構造』のための読書ノート，『基本文型の研究』林四郎[著]，明治図書1960，復刊：ひつじ書房2013  
金田一春彦(1950) 国語動詞の一分類，『言語研究』15，再収：金田一[編](1976)  
金田一春彦[編](1976) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房  
久野暲(1973) 『日本文法研究』大修館書店  
情報処理振興事業協会(1990) 『計算機用日本語基本形容詞辞書 IPAL(Basic Adjectives)』同技術センター  
佐藤信夫(1978) 『レトリック感覚』講談社[文庫1986/1992]  
宮島達夫(1996) カテゴリー的多義性，『日本語文法の諸問題—高橋太郎先生古希記念論文集』鈴木泰／角田太作[編]，ひつじ書房  
ライオンズ，ジョン(1973) 『理論言語学』國廣哲弥ほか[訳]，大修館書店

Kuno, S. (1973) *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Lyons, J (1968) *Introduction to Theoretical Linguistics*. (上掲翻訳書：『理論言語学』1973)